

香川の医療最前線



園かわひとともひな 1988年徳島大医学部卒。同大付属病院、徳島県立中央病院、小松島赤十字病院を経て、1997年に旧香川小児病院。2013年から現職。普通寺市出身。51歳。

小児の心臓病は、自然治癒する軽いものから、すぐに治療が必要な難治性のものである。血管に異常を抱える先天性心疾患や心臓の筋肉が薄くなる心筋症などで、同じ病気でも症状は年齢や病態によって異なることが多いという。四国こどもとおとなの医療センターの川人智久小児心臓血管外科医長に、症状や治療方法について聞いた。

小児の心臓病

— 増えている疾患は。
先天性心疾患は、胎児期の偶発的な心臓の構築異常と考えられており、出生数に対する発生頻度はほとんど一定だ。センターでは新生児、特に低出生体重児の動脈管開存症の手術件数が増えている。し、血液が流れやすい状態に変化する。そして、動脈管は収縮して閉鎖するのが正常なケースだ。その動脈管の収縮が不完全で、内腔が残っている状態を動脈管開存という。動脈管が開存したままだと、胎児期とは

児では手術への予備力が少なく、薬剤による治療が試みられる。しかし、この薬剤は同時に、腎臓の血管も収縮させ腎障害を起こすこともあり、効果が続かない時は手術を要する。
— どんな手術か。
左肩甲骨下を切開して動脈管を結紮することが多いが、体重干支未満の超低出生体重児のように横向きにする呼吸が不安定になる場合は、前胸部の切開で行う時もある。動脈管が比較

先天性の動脈管開存症

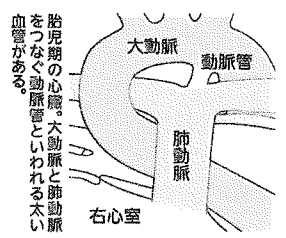
低出生体重児で手術増

— 先天性心疾患は種類が多いと聞くが。
— 先天性心疾患は種類が多いと聞くが。心臓の壁に小さな穴が開いている心室中隔欠損や心房中隔欠損のような比較的単純なものから、片方の心室が正常に発育しない機能の単心室のような複雑なものまでさまざま。1回の手術で終わるもの、段階的に複数回の手術を要するものがあり、手術時期も新生児期から思春期まで幅広い期間が対象になる。

— 増えている疾患は。
先天性心疾患は、胎児期の偶発的な心臓の構築異常と考えられており、出生数に対する発生頻度はほとんど一定だ。センターでは新生児、特に低出生体重児の動脈管開存症の手術件数が増えている。し、血液が流れやすい状態に変化する。そして、動脈管は収縮して閉鎖するのが正常なケースだ。その動脈管の収縮が不完全で、内腔が残っている状態を動脈管開存という。動脈管が開存したままだと、胎児期とは

— 増えている疾患は。
先天性心疾患は、胎児期の偶発的な心臓の構築異常と考えられており、出生数に対する発生頻度はほとんど一定だ。センターでは新生児、特に低出生体重児の動脈管開存症の手術件数が増えている。し、血液が流れやすい状態に変化する。そして、動脈管は収縮して閉鎖するのが正常なケースだ。その動脈管の収縮が不完全で、内腔が残っている状態を動脈管開存という。動脈管が開存したままだと、胎児期とは

逆に大動脈から肺動脈に血流が流れるようになり、身体に必要な血流の一部が肺に逃げてしまったり、肺に血液が流れすぎて呼吸障害や気管出血の原因となったりする。このため、大きな動脈管開存では早期の治療を要することが多い。
— 治療方法は。
新生児、特に低出生体重



的小さい場合は症状も軽く、内科的治療で成長を待たせることもできる。新生児では、肋骨と肋骨の間が狭く、カメラや器具の挿入が困難なこと、出血時の対応が遅れる可能性があること、開胸手術の場合でも小さな切開での手術を心がけていること、などから胸腔鏡手術のメリットはあまり大きくないと判断し、現時点での導入予定はない。今後、手術器具の発達などで安全性がさらに高まるようなら考慮したい。

■ 四国こどもとおとなの医療センター小児心臓血管外科
前身の香川小児病院時代から先天性心疾患の治療を行っているほか、漏斗胸などの胸部変形の手術治療も手掛けている。心疾患に対しての手術件数は年間約80例。小児心臓血管外科としての常勤医は2人。
所在地：普通寺市仙遊町2丁目1-1
電話：0877(62)1000
http://www.shikoku-med.jp/